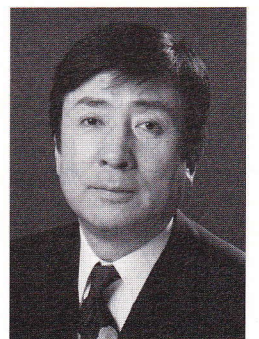


日本は今こそ能動的な外交に踏み出せ

中・ロ・韓の野望とアメリカの孤立主義で

「グレートゲーム」が日本を呑み込む

作家 外交ジャーナリスト
手嶋龍一
TESHIMA
Ryuichi

2013年は「動乱の始まりの年」と言っている。それは東アジアの海洋を舞台に日本、中国、韓国、ロシア、そして北朝鮮が自らの国益を懸けて対峙する「グレートゲーム」の始まりである。外交ジャーナリストの手嶋龍一氏がレポートする。

*

2012年11月、中国共産党は習近平氏を新しい総書記に選出し、「海洋強国」を目指すと言明した。中国は強国の証として空母機動部隊を創設し、日本の尖閣諸島を窺う構えだ。北の海に目を転じるとロシアが北方領土に、西の海では韓国が竹島に攻勢を強めており、北朝鮮はミサイル発射で揺さぶりをかけている。

日本は国境線はいま、周辺国の攻勢にさらされて縮み始めていると言っている。日本が国際社会に存在感を示すには、際立ったリーダーシップの確立こそ急務だろう。これまで東アジア安定の礎だった日米同盟が脆くなっており、手を携えていけば解体の危険すらあるだろう。

中国が「核心的利益」と位置付ける尖閣問題こそ、外交にかける日本の意志が問われている。10年9月、ヒラリー・クリントン米國務長官は日本が実効支配している尖閣諸島に日米安保条約の第5条を適用すると言明した。これに対して中国は、外交の限りを尽くして「クリントン発言」を切り崩そうとしている。こうしたなかで日本政府は、クリントンなき2期目のオバマ政権にも「ヒラリーの約束」を引き継がせることこそ死活的に重要となる。

9・11テロ以来、アメリカの戦略の重心は中東に傾いてしまったのだが、その間に中国は影響力をぐんと増している。その戦略的空白を埋めようと、アメリカはいま、東アジアへの回帰を急いでいる。だがそれは必ずしも日本への回帰ではない。むしろオーストラリアとの絆が一段と強まっていることに留意すべきだ。

北方の大国ロシアもまた極東地域で増大する中国の影に敏感に感じ取り、中国への牽制に動いている。だとすれば、ロシアは日本と戦略的絆をもつと強めてもよいはずなのだが、両国の喉元に突き刺さった北方領土という「トゲ」がそれを妨げている。

民主化の進む中東に目を向けると、パレスチナやシリアで軍事衝突が続いている。これらの紛争の背後には核開発を進めるイランの影が蠢いている。12年、アメリカはイランの核保有を阻止しようと、主要国に働きかけて、イラン産原油の輸入を制限しようとした。中国、EU、日本、韓国など関係国にイラン産原油の輸入差し止めをさせて封じる拳にでた。

日本は結果的にイラン産原油の輸入量を減らしながら輸入自体は継続することになった。そのさなか、鳩山元首相がイランを訪問し、イランの代弁者のように振舞って国際社会の